

占領期のアニメーション映画 ——丸山章治『ムクの木の話』

嬉美智章

漫画映画（以下、アニメーション）『ムクの木の話』（東宝教育映画部）は、連合国軍占領下の一九四七年に公開された。本作品は、東宝教育映画部の第一回作品で、『すて猫トラちゃん』（政岡憲三演出、日本動画社・東宝教育映画部）、『ちどり』（湯原甫演出、東宝教育映画部）と共に東宝系のログラムで上映され、相当な成績をあげたといふ。

本作品は上映時間約二十一分のモノクロ短編アニメーションである。形式としては、通常のセルアニメーションと立体（或いは半立体）の造形によるストップモーションアニメーション、そして特撮を組み合わせた実験的な作品となっていた。また、台詞はなく、フルオーケストラの音楽に合わせて、四季の移り変わりの音楽に合わせて、四季の移り変わりゆく。一見して分かるように、「冬」は

春遠からじ』を題材に、映画音楽家の早坂文雄によつて、この作品のために書き下ろされたものとなつてゐる。

作品の舞台はムクの木のある山で、秋から冬、そして春を迎えるまでが描かれゐる。秋は実りの季節であり、虫たちは演奏会を開き、小鳥たちは群れをなしてムクの木に集まり楽しく遊ぶ。そんな山に冬が訪れる。「冬」は氷魔として描かれ、山の生き物も木々も、全てを凍り付かせていく。そして、氷魔の冷たい吐息（吹雪）で氷付けにされた木々は、銃器を持つ兵隊や「鉤十字」の姿へと変貌させられる。また、台詞はなく、フルオーケスト

ナチス・ドイツの「ファシズム」の表象として描かれているのだ。氷魔が「俺の天下だ」と叫んだとき、ヴィーナスによつて氷魔は退治される。ヴィーナスが踊り、陽光が差すと、氷に閉ざされた木々は元の姿へと戻り、一斉に芽吹く。春の訪れである。春の陽光は「自由の光」と表現され、ヴィーナスのイメージと共に描かれる。これは、民主化による全体主義からの解放のイメージであり、「自由の光」、そして、ヴィーナスは、アメリカのメタファーとして描かれているのだ。

占領軍のメディア政策は、日本人の教化、つまり日本人への民主主義の普及を任務とする民間情報教育局（CIE）と、占領政策を阻害する要素の取締を任務とする民間検閲支隊（CCD）の二重体制で行われていたが、こうした「民主化」を讃美する物語は、「民主主義映画」「民主主義啓蒙映画」を奨励するCIEのメディア政策に沿つたものであったといえよう。

また、アメリカのメタファーがヴィー

ナスであるという点も、占領期のアニメーションを考える上で興味深い。例えば、本作品とほぼ同時期に制作された熊川正雄の『魔法のペン』（京都映画社一九四六年）では、「西洋人形」の少女が登場する。『魔法のペン』は、主人公の少年が、描いたものが本物になる「魔法のペン」で街を復興させるという夢を見る物語である。『ムクの木の話』同様のCIEのメディア政策に沿った作品となっている。その物語の中で、主人公の少年に「魔法のペン」を授けるのが「西洋人形」の少女なのだ。彼女は、日本に対して物質的な援助を行うアメリカのメタファーと見ることができる。直接的なアメリカ表象が避けられていた当時において、アメリカを女性的なイメージで表現しているという点が当時のアニメーションの特徴の一つとなっている。

次に、独特的な映像表現に目を向けたい。本作品の特徴は、造形によるストップモーションアニメーションとセルアニメーションを組み合わせた映像にあると

いえる。同時上映の『すべて猫トラちゃん』は、アニメーション制作専門の日本動画社（後の東映動画）との提携で制作されており、ディズニーランドの見事なフルアニメーションとなっている。その一方で、本作品はどうちらかというと、セルアニメーションの映像よりも、特撮パートに注力されている。

例えば、全てが凍つた世界は、ガラス板に吹き付けられた氷が凍つていく映像と合成され、凍り付いたレンズを通したような「冷たさ」を強調する独特的な表現となっている。水の結晶化を早回しで撮影した映像は、戦前の映画法のもと制作されていた「文化映画」や「教育映画」で培われた技術が使用されていると考えられる。

また、背景の描き方にも特徴がある。虫や小鳥たち、そして氷魔といった、「動き」のあるキャラクターは通常のアニメーションで描かれているのに対し、背景は通常の手描きのものと造形によるものが、シーンによって描き分けられている。

秋や春を中心とした、虫や小鳥たちの「動き」があるシーケンスでは、おむね背景も一般的な手描きの背景で描かれるが、氷魔が登場する「冬」のシーケンスは造形という具合である。氷魔は手描きのアニメーションで描かれるが、凍ついた木々は造形物で表現されている。手描きのアニメーションとは異質な造形物を組み合わせることによって、氷魔以外の全てが凍り付いた、まさに「静止」した世界が表現されているのである。こうした特撮部門を担当したのは、特殊技術課時代から東宝に所属するうしおそうじ（当時は本名の鷺巣富雄で活動）であった。東宝特殊技術課とは、『ムクの木の話』を制作した教育映画部の前身で、一九三七年に円谷英二を代表として東宝制作部の一課として創設されたものである。その後、特別映画班と名を変え、一九四一年には航空教育資料製作所へと発展している。円谷の特撮技術を活かし、さらに実写やアニメーションを交えて、陸海軍依頼の軍事訓練用フィルムなどを

多数制作しており、うしおも円谷の元で

軍事技術映画を手がけている。ちなみに、うしおによると、本作の特撮シーンは円谷から一二〇点の評価を得たという。

戦後、軍からの依頼が無くなつた航空教育資料製作所は、造形技術映画部と名称変更された後、労働争議を経て教育映画部へと再編されることとなるが、スタッフは引き継ぐ形となつていて、例えばうしおの他にも、「製作」としてクリエイティブで活動している湯原甫は航空教育資料製作所の元第一工場制作部長であり、監督の丸山章治も航空教育資料製作所に所属していた。一九四六年九月上旬号の『キネマ旬報』にも、「東宝撮影所では終戦によって解消した航空資料研究所の諸研究、特に図解技術、造形美術を生かして

品であるといえる。

以上、占領期のアニメーション『ムクの木の話』について見てきたが、ストーリー上ではCIEの占領政策に沿つたものとなつていて、映像表現の面においては戦前の技術が継承されていた。戦前との決別としての新たな物語と、技術面での連続性、この二面性が本作品の特徴であるといえるだろう。

参考文献

山口且訓・渡辺泰『日本アニメーション映画史』(有文社 一九七七年八月)

林穎四郎「日本映画史のミッシング・リンク／東宝の航空教育資料製作所(上) 東宝の航空教育資料製作所の生い立ち」『映画テレビ技術』二〇〇六年三月)

造形技術映画部を設置し第一回習作として「ムクの木の話」の制作にかかつた」とある。このように、航空教育資料製作所出身スタッフの手によって制作された本作は、戦前の特撮や「教育映画」の技術を継承しつつ新たな表現を志向した作